HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	言語的基準
Author(s)	福村, 虎治郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 3, 71-86
Issue Date	1954
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33224
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P71-86.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

言語的基準

福村虎治郎

言語的基準

福村虎治郎

一

言語の意味と形態は互に作用しあつて一つの纏りをなし、この纏りでもつて我々の日常の心的経験の記号となつている（Saussure, *Cours de linguistique générale* 九九頁以下）。この経験は外界の事情に誘われるものであるが、結局我々がこの外的な事情を内的に意識しなければ、これら経験は成立しないものである。このような心的経験を言語以前の本来的心的作用とする。そして言語の意味のうち本来的意味はこの本来的心的作用に対応するものである。この本来的心的作用は人種や年齢に関係なく同一である。我々の心的作用は原則として実体に向う作用であり、その実体を「ある属性を有するもの」、「ある動作をなすもの」と意識する。又他の実体との種々な関係において意識する。雨とか風とかいうような現象も、一般の人においては現象そのものが中心となつてはいるが、その現象に関係する種々の実体が共に表象されている。これら種々の意識即ち表象の結合の仕方が人間一般に共通なのである。しかし今述べたように普通は「ある属性を有するもの」とか「ある動作をなすもの」と表象しているのであつて、単に「もの」として表象していることは稀である。この「……なるもの」なる表象の内容は人間に一般的であるとは考えられない。文明人と未開人、大人と子供との間にはかなりの違いがある筈である（中島文雄「文法の原理」一〇三頁以下参照）。更に中心的意識とか意識の時間的前後などが考えられる。例えば白い円形の花を意識する時、その属性のうち「白い」と「円い」のいずれが先に意識に上るか、又はいずれが意識の中心を占めるかなど問題になる。更に一例をあげると、相関的関係にあるA、Bを考える時、この関係はAとBとの間に起るものであるから、「もの」としてのA、Bいずれを中心に表象してもそれに伴つて間接に他のものが考えられる。そしてこの場合、A、Bの内容を考えないと、いずれを直接に表象しても表象の結合の仕方には変りない。しかし内容を考え、時間的前後を問題にすると、この二つの表象作用又はこれによる判断作用は異るものと考えられる。しかしこのように、内容如何によつては表象されないものもあるが、それを問題にしなければ、この意識の前後関係や重点のおかれる場所などに関しても、人種や年齢の別に関係ない一般的性質も認められると思われる。同一人であつてもその時の周囲の事情、殊に生理的条件に影響され、時と場合によつて異ることは一般的に言い得るであろう。

本来的心的作用の特徴は以上のようなものであるが、しかしこの作用では単に表象の内容そのもの又はその結合の仕方や判断作用や情意作用の仕方のみを考えているのであつて、その内容を考慮してその結合の仕方や判断作用が正しいかどうかは問題にしていない。例えば、今「白い黒い花」なる表象の結合をなしたとする。この時我々は先天的に白いと黒いは相反する概念であり、共には成立することは出来ないことを知る故に上の結合は誤つていると判断する。しかし表象の結合の仕方そのものは「白い円い花」と同じである。又ある花を見て桜の花と判断し、後になつて梅の花と判断したとする。この二つの場合、判断の性質は全く同じであり、後で又何か他の花と判断され、従つて桜でも梅でもないことになるかもしれない。もしこの最後の場合が真であれば上の二つの判断は共に偽であることになる。しかしともかく先の二つの判断は共には成立することは出来ないのであり、少くともいずれか一つは偽である。我々は白と黒の場合のように、桜と梅とは選言的な概念であつて共には

成立出来ないことを先天的に理解し得るのである。しかし本来的心的作用からすると、この二つの判断は共に現実に可能なのでありそこに何ら矛盾はない。この判断の真偽の問題そのものは言語や心理又は純粋論理の範囲を超えているのであるが、しかし真偽や正誤即ち妥当性が問題となる心的作用は本来的作用と区別されなければならない。本来的心的作用は論理的心的作用を基礎にはしているがそれと同じものではなく、これら異る二つの心的作用を基礎にして言語的心的作用が成立つことになる。このようにして言語は意味と形態の二要素からなり、その意味は論理的心的作用と本来的心的作用の組織とは異る言語独自の組織を持ち、従つてこれら両作用内に見られる異同は必ずしも言語的心的作用の異同と一致しない。

例えば論理的思考は全称判断 (Universal judgement) と特称判断 (Particular judgement) の区別をなし、これに肯定及び否定なる質が関係し、判断の真偽関係が問題とされる。言語的表現としては、All S's are P は全称判断に属し、Some S's are P, Some S is P は特称判断に属す。しかし言語的分類としてこれよりも重要なのは Some S's are P が Some S is P と離れ All S's are P と一纏りをなし、複数と単数の区別をなすことである。又 a tall tree, a wooden chair の tall と wooden を本来的思考作用に照して比較してみると、tall は「丈高いもの」を表象し tree による表象と結合する。しかし wooden の場合はこれと異る。wooden による「木製のもの」なる表象は前と同様に chair の表象と結合するが、「木製のもの」は決して「丈高いもの」と同じ本来的心的作用でなく材料と製品の二つのものを表象し、その相関的関係を表わすのである。従つて wooden chair は相関関係によつて限定されている表現なのである。かくして言語的には形容詞として一括されてそれ以外は大部分辞書の問題とされ区別される必要のない語も、本来的思考では区別さるべきである（中島文雄 同書 一七八－一七九頁）。

反対に形容詞とされる a one-time governor (元の知事) の one-time と、動詞とされる There was a king の was を比較してみると、これら二語は言語的区別を超えて密接な関係にある。one-time は tall と違つてものに帰属する性質を表わしはしない。one-time によつて直接に考えられるものは、あるものを今より以前のものと判断する判断者であり、しかも今より以前は文字通りに今を中心にして考えられた過去として相対的に考えられている。そのように間接に考えられたものが知事の表象と結合して、しかも現在は最早や知事でないのであるからこれを修正しているのである。一方 There was a king における was は one-time に見られる存在判断の部分に対応する。現在を意識する判断者が現在からあるへだたりを持つところの過去においてある王の存在を承認しているのである。即ち one-time の意味には was の意味が前提として含まれている。勿論その判断される対象に関して one-time と was では異るのであり、one-time は one-time governors の如く複数とも関係する。しかし was にはこの作用は伴わない。しかしこれは対象に関係する違いであつて作用そのものの違いではない。

以上のように論理的心的作用や本来的心的作用を基準にして言語を取扱うと言語の組織が崩れる場合が珍しくない。従つて言語は前論理的なものであるとか言語独自の論理を持つとか言われている。しかし論理性や本来性は一般的なものである故、言語の意味を取扱う時、ともするといつの間にか直接的な言語の意味を離れ、論理的意味や本来的意味を取扱つてこれを基準にして言語事実を整理していることがある。ここに無理が生じてくる。例えば文において主部 (Subject) と述部 (Predicate) の区別が屢々問題となる。この時人々は往々にして論理や心理にたよる。しかしそれが必ずしも言語事実を整理し得ないので、論理的主部 (Logical s.)、論理的述部(Logical p.)、心理的主部 (Psychological s.)、心理的述部 (Psychological p.) などと呼んでいる。例えば、ガベレンツ

(G. v. d. Gabelentz) は時間の前後関係によつて区別する。第一に意識にのぼる思考Aが主部であり、それに結びつく思考Bが述部であり、これらAとBが一緒になつて新たな主部を形づくり、更にCなる述部を要求すると言う。彼はこのような意識の時間的前後関係が言語にも平行的に表われると考えているようである。かくして、Rich he is に於て rich は主部となる。しかしこのような説は言語的に大した効果を示しはしない。又イェスペルセン (O. Jespersen) もこの説を批判しているように、このような意識の時間的前後は決して言語的前後に対応はしない。同じ順序で意識にのぼつたとしても、英語と日本語では、'He saw a dog'「彼は犬を見た」と語位が異るのが普通である。又パウル (H. Paul) は「ドイツ文法」(*Deutsche Grammatik*) でガベレンツの説を修正している。彼は先に意識にのぼるものが必ずしも言語的に先に表現されない、何故なら話し始める時述部の思考が新な重要な思考として先に表現されることがあると言つている。又彼の「言語史の原理」(*Prinzipien der Sprachgeschichte*) では心理的述部は最も重要な部分であり、それを伝えることが文の目的であり、従つて最も強い調子を持つと言つている。Karl fährt morgen nach Berlin (カルルは明日ベルリンへ車で行く) において、聴者にとつて総てが同様に初めて知ることであるならば、Karl は心理的主部であり、fährt が述部であり、この fährt が次に主部となり第一の述部として morgen 第二の述部として nach Berlin がくる。しかし聴者が上の要素のいずれかを知つているとすると、知らない要素が心理的述部となる。かくして morgen も nach Berlin も述部となり得るのである。もしベルリンへ行く方法そのものがわからない場合は、fährt ですら一般的な行く動作とその行き方とにわかれ、その行き方が述部であると言う。このような心理的主部、述部の区別はそのまま言語にも適用される。例えば、I am hungry においては、もしこれが Who is hungry ? に対する答ならIが述部であり、Is there anything amiss with yon ? に対するものなら hungry が述部である。しかしこのようなものが文の主部と述部であるならば、この区別をたてることが文法上何ら重要ではないのである。パウルのように一語 fährt の意味を二つの部分に分析して主部と述部を認めることなどは、文法ばかりでなく一般に言語に関してどれだけの価値があるか甚だ疑問である。従つてイェスペルセンは以上の諸説を批判した後で、主部や述部の名称は文法的なものばかりに使用し、論理的とか心理的などと形容しない方がよいと言つている (*The Philosophy of Grammar* 一四五頁以下)。

II

しかしながら言語事実を異同に従つて分類するに、言語本来の範囲外にあるものを基準にしている例は他にも決して珍らしくない。先ず第一に言行為の起る場面を基準にすることがある。この場面そのものについても種々問題はあるが、今はあまり深くこれを論じないで、言行為を起す刺激や、それに伴う我々の外部にあると考えられる状態及び我々自身の身心の状態を一括してこう呼ぶこととする。例えばガーディナー (A. H. Gardiner) は文の分類の基準を言 (Speech) の三つの要因である話者、聴者、語られる物のいずれに強調が与えられているかその度合であるとする。話者に強調が与えられると感嘆、聴者に強調が与えられると質問と要求、語られる物に強調が与えられると陳述となる (*The Theory of Speech and Language* 一八七頁以下)。氏は「言」(Speech) と「言語」(Language) の区別を主張し、文は言の単位であり、言の要因の中に上の三つのものが数えられるとするので、このような基準を採ることも氏の説に於ては一応理解されるのである。次にフリーズ (C. C. Fries) の文の分類もこれに類す。即ち氏は文の分類を反応 (response) の違いによつて決める。即ち㈠直ちに、規則的に口答の反応だけが続くもの、㈡直

ちに行動の反応が続く、時には口答の反応の非常に限定されたある表に属するある一つの反応を伴うこともある、㈢不規則に合間、合間に投入され、しかし話しの流れをさえぎることなく、注意を表わす非常に短い口答の記号を伴うもの、但し必ずしも後に続くとは限らない。そして第一は主として質問、第二は要求、第三は陳述であるとなす（*The Structure of English* 四一頁以下）。氏はこのように文の分類の基準を反応に求めるのであるが、氏も認めるように百パーセントの瀕度をもつて確実に反応するものでなく反応のない場合もあり、又反応を期待しない話もある（同書四一、五三頁）。又我々は命令に対して行動の反応を伴わない場合、陳述に対してロ答の反応を伴う場合があることを疑わない。日本語に対してこのような態度でのぞむことも勿論可能である。例えば三尾砂氏はこのような方法をとつている（「国語法文章論」）。氏はそれを明かに述べてはいないが、氏の対象はやはり言語そのものではなく言語と場面との関係である。氏は文の類型を決める場合、場面をそのままに忠実に表現することや、場面を単に指向することなどを基準にする。このような見方に立つ限り氏の方法は認められてよいと思われる。従つて「文がほかの文とちがつた性格として区別され、またはほかの文と同じ性格のものとしてひつくるめられる原理は、文の形式からでも内容からでもなく関係から得られるということ、その関係は文の内部の項と項との間の関係でなくて、文と外がわのものとの関係であること、ただし文とはゆかりのない外附的なものではなくて、文の在る場と文との関係であること、これである」というようになる（同書八一頁）。しかし文章論と呼ばれるものが必ずしもこのようなものに限られるわけではなく、言語そのものを対象とした文章論も当然考えられるのである。勿論このようにして場面と言語の関係を研究することは、言語そのものの中にとどまつていては理解に困難な言語の特徴を明かにし、各言語の論理性や情意性の違いを明かにし、理想的言語のありかたを暗示し、実際面に於てもかなり有益ではある。

このような態度は文の分類にとどまるものではない。時には基準そのものが客観性を持つかどうか疑わしいこともある。例えば、ローデ（E. Rodhe）は「近代英語における他動性」（*Transitivity in Modern English*）なる論文において他動性の強弱を論じている。氏によると、kill と put to death の他動性を比較すると、put to death には「生命の剝奪」なる観念が kill の場合より弱いように思われる、何故弱いかというと、kill においては上の観念が一語に集中しているが、put to death においては三語に分布されているからであるという（北畠経夫訳「他動性表現の種々相」〔英語学パンフレット〕六頁）。勿論 kill と put to death は言語的構造からして異るが、「生命の剝奪」なる観念が一語か三語かによつて表現されるにつれて強くなつたり弱くなつたりするとは一般に我々を納得させ得るであろうか甚だ疑問である。氏は更に shelter it from the northern blast に於て、もしこれが shelter it で終るならば shelter は最大限の他動力を含むこととなる。その理由は動詞と目的語だけで一つの完き観念を表わすからである。然るに右のような例では、from the northern blast は shelter から注意を奪う故に shelter の他動力は弱められる。同様に、crack one's whip（ピシリと鞭をくれる）の crack の他動性は、crack one's whip at the horse の crack に見られる他動性より強い（同訳二四―二五頁）。しかしながら shelter it と shelter it from the northern blast の二つの表現において、後の shelter it が先の shelter it より弱く注意されていると一般的に言えるかどうか頗る怪しい。又このような注意の多少が適当な機械を用いて証明されたとしても、我々がこの多少を意識しているかどうか、更に意識されたとしてもこの意識が shelter の意味かどうか疑問が継起するばかりである。

すぐ後で氏は He stabbed me in the shoulder with a knife と

Montigny … stabbed him to the heartに於て、to the heartは「方向」を示し、従つて「能動性」を表わし強調的であり、それだけ注意をひきつける、しかるにin the shoulderは「場所」を示し「受動性」を表わす、従つて動詞stabそのものの他動性はin the shoulderとの結合の場合が強いと考えられると言つている、ところが別な方面から見るとこれは正反対になるとも言つている。stabbed in the shoulderではstabに含まれる殺意の観念がin the shoulderの為に明かに除去されているが、stabbed to the heartにおいてはこの殺意の聯想が少しも除去されない故に、その他動性低減の度合は遙かに少いと言つている。このような場合はstabの意味そのものが後続する修飾句によつて限定されて二様になるのであるから、見方によつては他動性の強弱云々は認められると思う。しかしこの基準と先の基準では性質が異つている。これはともかく言語的なものと認められるが、先の基準は言語以前のものを前提としてそれから極めて曖昧に導かれたものである。更にローデは次のように言う。「目的語が暗示されるに当つても、その遅速に種々の相違がある。目的語を暗示する助けとなるような語が、文中にあることもあれば、ないこともある。前者の場合その他動力の潜在性は比較的に少く、後者の場合比較的多い」(同訳五三頁)。しかしこのようなものを基準にしたならば際限のないものとなろう。同一の人が同一の文章に対しても、生理的条件によつて種々の段階の他動性の強弱を経験することとなる。勿論言語の意味そのものも個人間に違いがあることも認めなければならないが、ローデの言う違いは決して意味そのものの違いではなく、言語に対する時の注意とか理解の遅速などである。

これは極端な例と思われるが、ヴァン・デル・ラーン (Van der Laan) が英語の進行形 (Progressive form) を説明した態度もこれに近い (*An Enquiry on a Psychological Basis into the Use of the Progressive Form in Late Modern English*)。氏は進行形の用法を論ずるには、二つの要素を考えなければならないとし、一つは進行中の動作の性質、今一つは観察者の心であるとし、第一の要素は従来主として文法家が詳述したものであるが、第二の要素は殆んど認められなかつたとしている (齋藤静訳「現代英語進行形の研究」二〇頁)。更に「進行形は一つの動作、過程或いは状態が注意を喚起し、それが暫らくの間観察され、それと同時にこの観察によつて観察者の心中に覚醒する種々の感情を暗示するというような場合にのみ用いられる」と言う (同訳 三二頁)。そして従来の進行形の説明からしては次の如き文において何故進行形を使つてはならないかを充分に説明出来ないと言う。

I dropped on my knees beside him and leant my ear down to hear if he breathed. — A. Hope, *Prisoner of Zenda*
(私は彼のかたわらにひざまづき、耳をよせ、そして彼が息をしているかどうかを聴いてみた。齋藤訳)

このような例においては呼吸する動作は進行中である、それにもかかわらず進行形が用いてないと言う (同訳 一九頁)。しかしこの例で、進行形になつていない理由が氏の説く如きものであるかどうか疑問である。動作が進行中だと言うのは論理的見方である。実際確かに呼吸は一息だけで終るものではなく反復・継続的である。しかし論理的には同一の事象も言語的には異つて把握され異る表現法が可能である。右の例では、耳をよせた時を中心にみてその前後及び現にその時も呼吸していたと把握するか、又はそのようなことを重要視せず唯その過去の時に呼吸をしたと把握するかによつて進行形と単純形の違いはあろうが、この違いがそのまま氏の説くような違いに常に結びついているとは考えられない。又たとえ進行形の意味の一つが継続をあらわすものであつても、反対に継続は総て進行形で表現されるとは限らない。breatheはそれが意味する呼吸作用そのものの性質からして進行形にしなくても意味の誤解が起ることは滅多にない。勿論注意の有無は現実に起り得る。

しかしそれはやはり言語以前の心理作用であつて言語の意味そのものではなく、そのような注意作用が原因となりその結果として「進行中」なる言語的意味を持つ表現をとる場合が多い、と解釋するのが正しいであろう。

かくして、ヴァン・デル・ラーンの取上げた右の二つの要素は同一平面上の基準ではないと思われる。そして言語本来の域を超えている基準は必ずしも言語事実をよく説明しない。実際、I was reading the book when he entered the room のような表現はごく普通であるが、この場合「私」が本を読む動作と「彼」が部屋に入る動作のいずれにより注意を向けようが、was reading を read としては、意味からして二つの動作の時間的関係が曖昧になる。又氏は我々の精神が多くの印象を同時に受けるや否や、も早や一個一個の動作を個別に注意することが出来ない故、動詞は単純形を用いなければならないと言う（同訳 二六頁）。しかし、実際には次の例のように進行形が連続して使用されていることもある。

Little Miss Macy … was pulling off her uniform ; and the "Duchess" … stood brushing the powder out of her hair. The third woman was doing nothing … she sat regarding the others (Jespersen, *M. E. G.* IV. 一八二頁)

（小さいメイシー嬢は運動服を急いで脱いでいた、そして「公爵夫人」は立つたままで髪に刷毛をかけ髪粉をはらつていた。もう一人の婦人は何もしていなかつた。彼女は他の二人を眺めていた）

これら例を考えると注意の喚起の有無でもつて進行形を全般的に説明することは無理であると思われる。英語でこのような区別が言語的に規則正しく表現されているとは考えられない。しかし進行形の一つの用法として強意的用法があることは勿論認めなければならない。例えば、He is always laughing at everything（彼はいつもどんなことにも笑つてばかりいる）。この場合は既に言語以前の心理作用の域を脱して言語の意味になつていると考えられる。我々は普通強調的意味としてこの進行形を用いると意識している。以上のように考えてくると、ヴァン・デル・ラーンの方向を更に進め、時制（Tense）と叙法（Mood）の区別はなく、例えば進行形は「集中叙述」の形式であるとなす細江逸記博士の説も尚考慮の余地があると思われる（「動詞時制の研究」九四頁以下）。

III

これらは一般に言語の心理的説明とされているのであるが、かなり雑多な要素が混つてい、大体先に述べた場面が重要な基準となつていると考えられる。次に右と同様に心理的と批判されるが、かなり純粋な基準でもつて言語事実に対しているものがある。その一つは既に述べた本来的意味をもつて説明する場合である。これはマルティ（A. Marty）やフンケ（O. Funke）の立場である。

「註」彼等の立場は、日本では中島文雄氏の「意味論」「文法の原理」等によく紹介されている。

日本語について、時枝誠記氏の立場が大体そうである。例えば、日本語の動詞と助動詞の本来的意味の違いは大体英語のそれの違いに対応する。日本語のこの違いは国語学者によつて以前から認められていたのであり、前者は「詞」と呼ばれ、「物事をさしあらわしたもの」とされ、後者は「辞」と呼ばれ、「心の声」とも説明された。時枝誠記氏はこれをつがれ、この区別は氏の言語過程説の中で主要な点となつている（「国語学原論」二二九頁以下）。例えば、「行かう」、「行くか」の「行か」、「行く」は概念過程を表わすのであるが、「う」、「か」はこの過程を経ない話者の直接的な表現である。かくして「彼は行くか」に於ては行くのは彼であるが、「か」は話者の心的作用を表わす。これは本来的心的作用としては重要な区別である。「彼は行く」に於て直接に表象されてい

るのは彼であるが、「彼は行くか」に於て直接に表象されるのはその質問者である。しかしながらこの区別は言語に統一的に表われていない。従つて本来的心的作用を基準とすると、従来の助動詞のうち受身、可能、使役、ある種の敬譲の助動詞は辞より除外されて詞となる。しかし言語そのものを問題にしてその異同を考える時、これら助動詞を他の助動詞と区別することが、少くとも文法的に妥当であるかどうかが問題である。反省してみると、これら助動詞は他の助動詞と確かに違うのである。しかし一般の言語使用者にあつて、例えば、「打たう」、「打たれる」「倒さう」、「倒される」、「死なう」、「死なれる」…と対応が見られ、かくして「う」と「れる」は当然同一類群をなすのではなかろうか。

このような方法は言語の説明には重要であるが、それでもつて言語事実を整理する段になるとかなり無理が生ずる。殊にこの方法を言語の形態に迄進め、この本来的意味の詞と辞の区別は形態的にも対応して認められるとする場合この無理が目立つてくる。元来本来的意味は人間に一般的なものである。それが社会的な言語の形態に必ずしも対応しないのは当然である。日本語の構造は詞・辞の関係よりして左の如くなると言われる。

詞	辞
咲か	ない
咲く	か
咲く	■

最後の「咲く」の場合は零記号である。しかし命令を表わす場合は次のようになることがある。

詞	辞
立て	e
咲け	e

これを見ると、「立て」、「咲け」にeが加わつているが、実際には「立て」であつてeが加わる筈がない。強いて「立て」を「咲かない」と同じようにすると、tat-e と分析しなければならなくなる。一体日本語のような文字組織の言語にこのような分析をなすことが、言語そのものを忠実に観察することではなく、言語の主体的性格を見失つて、時枝氏の反対される観察的立場に近づくものではなかろうか（杉山栄一「国語品詞論」三四頁以下参照）。これは丁度先に述べたパウルの fährt の分析と同じで、本来的心的作用をそのまま言語事実にあてはめようとした結果である。又辞の一種には、例えば「花が咲きます」の「ます」の如く敬語があり、これは意味内容によつて他の辞と区別される。従つてこれも又形態上個有の場所を占める。従つて左図のようになる。

咲くか　　咲きますか

咲く	■	か
咲き	ます	か

石坂正蔵氏が指摘しているのであるが、時枝氏は「咲くか」の「か」そのものについては、他の箇所で疑問的陳述として説明しているにもかかわらず、この場合は単に疑問で陳述は零記号であるとする。従つて零記号と「ます」が対応して、敬辞「ます」は辞の場面的変容ということになる（石坂正蔵「敬語史論考」二一三頁）。しかし「咲くか」にこのような陳述と疑問が分析されると言うのは極めて疑わしい。時枝氏は言語における思想は特有なものであると考えているのであり、これによつて「三角形」と「三線によつて囲まれた図形」とは思想内容を異にすると言うのである。このように言語的意味を認めるのであるから、これと本来的思想との区別を明かにすべきものと思われる。

四

以上は総て言語事実を言語本来の範囲外にあるものによつて説明したり分類したりしているものであるが、これに対して言語本来の立場において説明分類することも可能であり、文法範疇はこの立場に立つのが妥

当と思われる。しかしこの立場を主張する者の過去における一般的な欠陥は、未だその言語的意味の本質を的確に把握していなく、又その方針にも一貫性を欠いていることのようである。例えばイェルムスレウ (L. Hjelmslev) の「一般文法の原理」(*Principes de grammair générale*) に見られる態度である。氏は言語は論理からも純粋心理からも区別されなければならないと言う (二三、二六頁)。しかし実際には氏の說くところかなりこの言に反していると思われる箇所がある。先ず氏はソシュール (F. de Saussure) 派の一人として「言語」(Langue) と「言」(Parole) の区別をなし、又品詞と主語、述語、目的語等を区別しこの両者は別個に研究されるとする (三七頁)。この点氏は多くの言語学者と同じである。例えば形容詞は名詞の働きをなしてもやはり形容詞であるとする (三一〇頁)。しかし言語の世界をそれ特有のものと認めるなら、品詞と所謂文の要素とは密接な関係にあることを認めざるを得ないであろう。この点今少し品詞分類の基準を考うべきである。最後の章は品詞分類にあてがわれているが、その分類の基準を(一)イェスペルセンのランク (Rank)、(二)意義部 (Semanteme) の形態部 (Morpheme) に対する関係即ち氏の言う機能であるとしているので、イェスペルセンの說を参考にしそれにとどまらず品詞をランクと関係させている点進歩していると思われるが、まだ言語そのものの基準に徹していない。従つて無理な点が見られ、冠詞は形態部と認められ品詞から除外されたり、副詞にも格機能があるとされたりする。又言語記号を分析して、一方には概念 (concept)、他方には音形象 (image phonique) と文法形象 (image grammaticale) があるとし (一一六頁)、しかして文法形象が形式 (forme) であるようである。氏によると文法は文法的要素における範疇を取扱うのであり、この範疇に於て形式 (forme) は成立する。即ち形式とは象徴観念 (idées-symboles) が範疇に組織されることによつて出来上る (一一二頁)。そして文法的要素としては意義部と形態部であり、範疇はこれら各々とこれら両者の結合関係によつて出来る。そしてこの結合関係を意義部から見たものを機能であるとする。従つて機能も形式の一種である (一〇七、一一三、一七一頁)。品詞はこの機能による分類である。氏の言う概念と文法形象の区別は氏によると極めて大切であるが、氏はこの概念を如何に見ているかかなり曖昧である。この概念が言語記号の一部であるなら、この概念と文法形象は密接な関係にある。ラテン語 bonus (「良い」男性)、bona (女性)、bonum (中性) の場合は論理的意味は同じで機能的意味は異る故、一応氏のようにこの区別を概念と文法形象の区別としてよいだろうが、dogs, cats, horses において複数 (Plural) なる文法形象と概念の関係は密接なものであつて、むしろこれが一緒に纏つて音形象に対すべきであつて、この複数なる形式が音形態と一緒に能記 (signifiant) 即ち言語記号の形態をなすとは考うべきではない。この点まだ氏は言語の意味とそれ以前の心理作用の区別を明確にしていないように思われる。

次に意義部と形態部の区別であるが、例えば、ラテン語で dominus (「主人」主格)、domine (呼格)、dominum (対格) 等に於て、本来的には domin だけでは何ら纏つた意味をなさない。同様に、us, e, um 等には何らそれに対応する独立的な意味はない。これら一語全体でもつて「主人なるもの」とそれに対しての種々の思考作用が意味されるのであつて、これを分析しては決して纏つた本来的思考作用は起らない。そしてこれを分析しようとすれば先に述べた 'fāhrt', 「立て」の分析のようになる。しかしながら言語的には、dominus, domine, dominum 等では語尾の違いによつて意味の違いが起ることが意識されている。しかもその語尾の違い us, e, um 等はかなり一般的なものである、従つて語内の形態上の区切りは認められる。この言語的に認められる二つの部分に夫々意義部、形態部なる名称を与えてもそれは正しいと思われる。同様に「立て」は「たーて」と二つの部分に分けられ、'fāhrt' について

も同様である。しかし先に述べた場合は、「立て」と 'fährt' を言語以前の心的作用を基準にして分析しようとしたため無理が生じたのである。さてこのように言語的に意義部と形態部の区別を認めたとしても、この例に限らず一般に何を基準にしてこの区別をなすかが重要である。右の例の domin に us, e, um 等にも本来的には独立的な意味はなく、単に言語的な期待を起させるに過ぎない。区切りは全く言語的なものである。イェルムスレウがこれに対する態度はかなり曖昧である。氏は前置詞を広く副詞に含め、副詞は通例三次項 (Tertiary) の機能を持つ意義部であるとする (三三一頁)。しかしこれに似ている性質を持つ格形態は形態部であるとする。氏は形態部の真の性質が何であるか未だ知られてないと言つているのであるが、ともかく二つの区別は認めているのであるから、その区別の基準を明かにすることが必要であると思われる。既に述べたようにこの場合論理的基準を求めるならば言語事実と全面的には合致しない。例えばヴァンドゥリエス (J. Vendryes) は「形態部は一般に文中の概念間の文法的関係を指示する音韻的要素 (一音、一音節、又は数音節) である」と説明し、その例の一つに des donateurs をあげているが -ateurs はそのままに上の説明にあてはまらない (英訳 P. Radin, *Language* 七四頁)。

「註」イェルムスレウは現在デンマークで指導的地位にあつて活躍しているようであるが、其の後の言語理論の発展の詳細なことは未だ筆者にはわからない。

次にイェスペルセンの方法について考えてみる。イェスペルセンもイェルムスレウとかなり似ている。氏は文法的取扱いには言語の形態を重んじ、しかも現代語を取扱う場合は古典語に影響されることなく、当面の言語そのものによつて体系だてなければならないと主張するのである。しかし氏の方法にもかなり一貫性を欠く点がある。氏はまだ言語的思考を深く考えていないように思われる。氏はイェルムスレウと同じく同一言語現象を三つの文法的見地から眺められるとして次のような例を示す。A 形態 (Form) として -ed (*handed*), -t (*fixed*), -d (*showed*), -t with inner change (*left*), kernel unchanged (*put*), inner change (*drank*), different kernel (*was*)、B 機能 (Function) として過去時制 (Preterite)、C 概念 (Notion) として、過去時、現在時における非現実 (if he *knew* : I wish he *knew*)、未来時 (it is time yon *went* to bed)、転移現在時 (how did you know I *was* a Dane ?)、全時 (men *were* deceivers ever)、(*The Philosophy of Grammar* 五六頁)。後で機能 (Function) はモーフォシーム (Morphoseme) と呼ばれている (*Analytic Syntax* 一〇五頁)。しかしながらこの三つの区別は互に対立しているものではない。AとCは言語使用者が常に意識している素材であるが、それに基づいて整理したものがBであり、Bは所謂文法範疇である。このCをイェスペルセンがどう考えているか問題である。彼はフンケに対する反駁で (中島文雄訳「品詞の機能」『英語学パンフレット』二四頁) Cにおいてすべての思考する人間に共通なものにぶつかる。人間は誰でも一と二との区別、男性生物と女性生物の差別を知り、過ぎ去りし時と現在の瞬間の相違を感ずると述べている。しかしその後 (*Analytic Syntax* 一〇九頁) ではこのCに含まれるあるものは言語外 (extralingual) 即ち言語的表現から独立的な世界に認められ得る物事や差別に関するものであり、あるものは言語内 (intralingual) 即ち前と同様に言語的表現外の何ものかに言及するとは言われないものであると言つている。従つてイェスペルセンはC即ち概念とは言語的なものでもあると考えている。このように氏はCに言語独自の意味を認めるようになつたが、未だ実際には何を言語外何を言語内と考えるか判然としていないようである。右の転移現在時は言語外ではないと言うが、He said, "I am John." がある場合には、He said that he was John となつて was が使われるのは当然であり決して言語内のものでないであろう。

イェスペルセンはCは一般に言語的なものであると考えるべきだつた。しかしともかくBの成立には先に述べたようにA、C両方を考慮しなければならないのである。しかるに実際に氏が取扱つているのは常にそうなつてはいない。

「註」右に述べたことからも理解されるように、氏の文法上の見解には変化したものもあるので、晩年には初期の考のあるものは訂正さるべきものと氏自身も気づいていたかもしれない。

氏は一般に関係代名詞とされている that を接続詞とするのである。その理由として次のように考える。指示代名詞 that は強形の母音を有し対応の複数形 those を持つ。しかるに接続詞 that は弱形の母音を有し持ち変化もしない。ところが普通関係代名詞と呼ばれているものは接続詞の場合と同じである。又次のような例をあげて接続詞との類似を示している。

I know (that) you mentioned the man.
I know the man (that) you mentioned.

そして又

There is a man {who / that} wants to speak to you.
This is the man {whom / that} we met yesterday.
I like the dress {which / that} you wore yesterday.

において、一般には who と that は交換される故に that は関係代名詞と考えられている。もし that を接続詞とすれば主語や目的語がなくなると思われる。しかし主語や目的語がない文が他にもある。氏はこのように言つて次の例をあげる。

There is a man below wants to speak to you.
This is the man we met yesterday.
I like the dress you wore yesterday.

又 than の次にも主語がない場合があるとも言つている (*M. E. G.* III. 一六五頁以下)。しかしこれらは主に形態上から述べているのであつて、that の右の例や all things that we see standing accomplished in the world (Carlyle) (この世界で完成されているのを我々が見る総ての物事) のような例において that がいかなる機能を果しているか、即ちイェスペルセンのCから見て如何なる意味を持つているか、that を接続詞とした場合の意味はどうかを考えてみれば、右の that はやはり who と同じに関係代名詞とした方がよいと思われる。この that はそれを含む節において立派に文の要素をなしている。この点接続詞の that とは異るのである。氏は後になつてこのような that を両様に解釋出来るとみている (*Analytic Syntax* 七六頁)。

又イェスペルセンはCに言語内のものをも認めるが、言語外と呼ばれているものが言語の内容をなすものか又は言語以前のものか未だ明かにしていない。仮定法は紛れなく真実な内容の場合にも使われると言うあたり、言語的思考と論理的な即事象的意味とを混同している。我々はたとえCのあるものが言語外なものと同じであつても、それは既に言語の内容となり言語の要素となつているものとみなすのである。然るにイェスペルセンは言語的なAとCから成立するBを説明するに論理的意味を取上げている。例えば実詞と形容詞の違いを述べて、大部分の実詞によつて示されるものは数種の性質によつて特徴づけられ、これに反し形容詞は種々の物に適用される一つの性質を取出す、しかし困難はネクサス的実詞 (Nexus-substantive) (普通は抽象名詞と呼ばれている) に見られると言う (*System of Grammar* 一一頁)。しかしこのネクサス的実詞を問題にしなくても、イェスペルセンの右の説明に戻る例は沢山ある。例えば、wooden, oaken, woolen 等は決して一つの性質を取出したものとは言われない。これと同じようなことが先に述べた主部と述部の区別にもみられる。イェスペルセンは他の学者の定義を効果少いものとして氏

自身の定義を与える。即ち主語（部）は比較的限定され特殊的であり、一方述語（部）は限定度が少い、従つてより多くの物に適用される（*The Philosophy of Grammar* 一五〇頁以下）。この限定度や特殊化の度は決して言語的なものではない。従つてこれでもつて言語事実の主語と述語を区別しようとすると、彼が批判した他の学者のなしたものに近い結果になる。

My brother was captain of the vessel.

The captain of the vessel was my brother.

右の二文を比較すると、先の文の my brother は後の文の my brother よりも限定されている。即ち先の例では私の唯一人の兄（弟）又は我々が今話しているところの兄（弟）であり、後の例では私の兄弟の一人を意味するか或は私が一人以上の兄弟を持つているかどうか疑問を残していると言う。しかし、He is my father や That man is my father のような文で限定度や特殊化の程度はどうなるであろうか。又氏自身人によつて主語と述語が違うことを認めているようである。例えば、What is the matter ? の間接的表現には … what the matter is と what is the matter の両様の表現があつて、これは前者では the matter が主語であり後者では what が主語であると解釋される（*M. E. G.* III. 18.53）。それではこの場合人によつて what や matter の限定度が異ることになる。しかしこのようなことは信じられない。イェスペルセンのこの主語と述語の説明に対してはガーディナーも反対意見を述べている（前掲書 二八四頁以下）。

以上は、イェスペルセンの主張にもかかわらず、氏の態度にはともすると言語外の基準が混入していることを表わしているものであるが、これは既に述べたように、氏がCを如何に見るか徹底的にそれを考えなかつたためである。このことはランクに関してのフンケとの論争にも表われている。フンケはマルティ流に本来的意味に従つて言語現象を説明しようとしているのであり、その基準でもつて言語事実を説明するにとどまり、それを体系だてようとしない限り氏の立場は是認される。従つてフンケの基準はイェスペルセンのCそのものではない。例えば、フンケの立場を徹底させると、The boy beats the dog において、「打つ」と言うと必ず「打つもの」のほかに「打たれるもの」も同時に考えられ、従つて beat が本来的に意味するものは、'beater' と 'something beaten' であり、これはランクからすると二次項(Secondary)と三次項(Tertiary)を含む。それに dog が加わつても「打たれるもの」を限定するに過ぎず、従つて dog はランクからすると四次項（Quaternary）となる。イェスペルセンはこのように一語に二つのランクを認めるようなことは考えていない。勿論Cにも本来的意味は含まれるのであるから、この場合はイェスペルセンの基準とフンケの基準は合致する。例えば、furiously barking dog をランクから見て、夫々三次項、二次項、一次項となす時、フンケの本来的心的作用の基準からもこれは認められる。イェスペルセンのCは実際は言語の意味なのであるから、これをフンケが本来的意味でもつて見直したのであり、従つてイェスペルセンがこのCとAによつて作り上げた範疇Bがフンケによると範疇をなさないことがあるのは当然である。こう考えるとフンケもイェスペルセンの立場をある程度認めてよいと思われる。フンケが形式と呼んでいるものがイェスペルセンのCの中に含まれているのである。イェスペルセンが his after dinner pipe, he smokes after dinner の after dinner を夫々二次項、三次項であるとするのは、先の例では after dinner は形式上形容詞の地位にあるものであり、後の場合は単純な副詞がこの after dinner の代用をし得ることによる。このような代用によつてランクを決めるのが形式的であるとフンケが言うのである。しかしイェスペルセンは又フンケの基準を理解していないようであり、氏のフンケに対する反駁は何ら効果をあげていない。イェスペルセンはフンケが Who steals my purse steals

trash (*Othello* III. iii. 157) を論じ、思想は If any one steals my purse, he steals a worthless thing であるとすることこそ代用の思想に迷わされていると反駁するが、フンケにとつては先の文は内部言語形式の文であり、後の文だけが本来的心的作用に即した表現なのである。イェスペルセンはCを純粋に言語的なものとしてそれによつて文法体系をたてるべきであつた。そうすれば、実詞と形容詞の区別や主語と述語の区別を右のように説明しなかつたであろう。否そのように説明しても、全般的に妥当するものではない補助的なものとしたであろう。そしてこの態度を徹底させたならば氏の場合における品詞とランクの区別は解消してしまつたであろう。イェスペルセンは先にランクの区別を純粋に論理的なものとしたが (*M. E. G.* II. 五頁)、後では機能上とすべきだと言つている (「品詞の機能」二五頁)。氏の言う機能は言語的なものである故、品詞の分類とこのランクの区別をもつとよく考えるべきであつた。以上総括すれば、フンケは本来的思考作用を基準としているのであるのに反し、イェスペルセンは言語的基準によろうとしていた。そして文法的態度としてはイェスペルセンのが妥当であると思われるが、しかしその基準に徹底せずその方法も一貫していなかつた。

イェスペルセンの言語的基準を更に進めたものにフリーズの英語構文の研究がある (*The Structure of English*)。氏は一般に名詞とか形容詞とか呼ばれている分類を排し、文の構造的意味を基礎にして語類を分け、主語とか述語等をも言語的立場に立つて説明する。しかし氏の方法にも又一貫性の欠如が見られる。氏は the poorest are always with us の poorest は構造上、一般に名詞、代名詞とされている語が属す語類1とする (同書 一四〇頁)。それにもかかわらず氏は a store clerk (二二四頁)、The abstract came Wednesday (二二九頁) の store や Wednesday も語類1とする。

五

しかしこのような欠陥は必ずしも言語そのものを基準にしようとする人ばかりに見られるのではない。既に述べたように、ローデやヴァン・デル・ラーンにも基準の混同があつた。ガーディナーにもそれが見られる。氏の文の分類の基準は既に述べたが、氏は呼びかけにも要求の文を認める (前掲書 三一〇頁)。You are not angry, James, are you ? は陳述と要求と質問の文特質 (sentence-quality) から成立している、しかし一つの文であると言う (三二二頁)。これは氏の言う文の量的基準 (二〇八頁) によつたものであろうが、しかしこの基準には言語の形式の見解が混入していると思われる。他の形式より優つて有力であると言う音調的文形式 (elocutional sentence-form) (二〇一頁) ですら氏の言う言 (Speech) の意味と常には調和しない。例えば氏は論理的述部 (Logical predicate) はそれに対応する形式として強勢 (stress) を持つと言うが (二七一頁以下)、しかし氏も認めているようであるが、否定の not, never 等は論理的述部であるべき筈なのに屢々強勢を持たない (二一九四頁)。このように必ずしも相容れないものを同時に基準にしようとするところに氏の不徹底さが見られる。総じて氏の説くところ言語と言語外のものとの関係であるという事におもい到らないようである。

又日本語を詞と辞に区別する場合も基準が同一であるように心掛けなければならない。日本語の格助詞は詞・辞の区別の辞に属するとされる。例えば「山から」、「山に」の「から」や「に」は山と他のものとの関係を表わすと言うのは正しくない、結局物に対する主体の認識に帰着するのであると言われる。しかし格助詞と言つても一様でなく、右の例のような関係では属性の場合と同様に直接に対象に関係すると考えるのが正しくは、なかろうか。「赤い」は本来的に「赤いもの」を表象し、「から」の場合は例えば、本来的に「あるものから」の「あるもの」と「あるもの

から…するもの」の「…するもの」との関係を意識させる。この「から」や「に」が直接的な主体的認定だとするならば「詞」と呼ばれている語も皆結局はそうである。我々は例えばあるものを山なり河なりと認定しているのである。従つて本来的思考からしてみても、日本語の助動詞と格助詞は全部同一類群をなすとは言われない。格助詞の場合も助動詞の場合と同じように詞と辞にわけられなければならないであろう。これは本来的区別である主体的意味の有無を、それと必ずしも対応しない言語にそのままあてはめようとし、そこに形態的にも統一性を見出そうとし、本来的意識作用そのものの観察が邪魔されたためである。

六

以上言語の基準は言語独自のものでなければならず、他の基準との混同を避けねばならないことを述べてきたのであるが、尚形態と時代の問題が残つている。イェスペルセンのBはAとCによつて出来上るものである。ところがAもCも言語的なものであつて、必ずしも人間に一般的なものではない、従つてBは当然言語によつて異る筈である。この点考慮しないために学者の間で種々議論が生ずる。成程C（概念）は言語的なものである、しかし一般に言語的なものでも辞書的なものもあるし、文法的なものもある。カーム（G. O. Curme）やドイッチバイン（M. Deutschbein）ではこの点未だ考える余地があるように思われる。例えばカームは英語に相（Aspect）を認めて、㈠継続相（Durative）、㈡瞬間的動作（Point-action）㈢起動相（Ingressive）、㈣結果相（Effective）㈤終止相（Terminate）、㈥反復相（Iterative）を区別する（*Syntax* xix）。勿論言語の意味としてこのような区別は認めなければならない。しかしカームのあげた例の大部分はそこに形態上何ら統一的なものを示していない。このようなものを文法範疇となすと際限がなくなり辞書との区別がつかなくなる。ドイッチバインが英語の相を、Iterativum, Frequentativum, Inchoativum, Intensivum, Perfektive, Imperfektive, Kausativum に区別し（*System der neuenglischen Syntax* vi）、叙法（Mood）を Kogitativus, Optativus, Voluntativus, Exspektativus に区別したのも同様である（同書　一一四頁）。

これに反しイェスペルセンはともかく意味と形態を対照して文法範疇をたてるのであるから、この限りにおいて辞書と区別される文法の方法としては妥当であると思われる。又Bが以上のようにして成立するものであれば、同一言語においても時代が異るにつれてそれが変り得ることは認めなければならない。従つて古英語（Old English）に名詞の格の数が四つであつたとしても又古典印欧語においてその数は更くに多くなろうと、現代の英語に関してはこれは単に参考にとどまるに過ぎない。この点でもイェスペルセンはソンネンシャイン（E. A. Sonnenschein）と意見を異にしているが、イェスペルセンの態度は正しいと思われる。しかしこの本質がイェスペルセンにとつて未だ明確に規定されていなかつたように、Aなる形態についても氏の態度は曖昧である。氏は形態として語尾や接頭辞のみならず、音調、語順、形式語をも含めるとは言つている。それにもかかわらず、氏の実際の取扱を見ると必ずしもこれは守られていない。基準そのものが妥当であるかどうかは問題になるとしても、形態上の基準をどう選ぶかによつて文法範疇が異つてくる。従つて唯表面に出た結果だけを論じても無益なことが多い。イェスペルセンとカームの違い、イェスペルセンとソンネンシャインの論争は主としてこれらの事情に起因しているようである（大塚高信「英文法ノート」三八頁以下参照）。彼等は彼等が唱える形態が何であるか明確にし、それを形態として認めて妥当であるかどうか考えてみなければならないのであり、更に意味と形態に関しての文法的取扱として彼等の方法が妥当かどうかをも考えなければならない。

既に述べたように過去の言語又は異る言語の文法範疇に迷わされない

と同様に、Cを把握する場合あくまでも共時的立場に立ち、歴史的な変化過程に禍されないよう注意しなければならない。言うまでもなく歴史的説明はそれとして存在価値はあるが、ある時代の言語の記述的説明は、その時代の一般の言語使用者に認められる言語意識の説明でなければならない。ある言語的事項のA時代における状態は、その中に既に変化の要因を宿しているのであり、その要因のために緊張体系が崩れ変化の過程に入り、暫くしてB時代で一先ず落着く。しかしこれ又A時代と同様に変化し始める。このような過程を繰返してゆく。従つて今B時代のある言語事実を見るに、その事実の緊張体系そのままに考察する共時的見方と、その体系を齊したる過程と、更にその変化過程の原因を中に蔵しているA時代の体系との関係を調べる通時的見方が可能である。この通時的な見方は、ある時代の言語事実が体系から離れ孤立的な場合、よくその由来を説明する。例えば、as it were, I had better do so に見られる were, had はイエスペルセンの示した三つの区分のうちBの「過去時制」に属すのであるが、Cの「概念」(Notion) からするとそこにあげられたどれにも属さず孤立的である。しかし時代を遡ると、これが仮定法であつたことがわかる。従つてCのうちの「現在時における非現実」又はこれに類似の意味に属していたのである。しかしながらこの歴史的見方による説明は現在の言語意識としての were, had には適当ではない。共時的立場からすると、were, had は最早や仮定法なる範疇には属さないと思われる。

しかしながら言語事実の分類に必要な言語的意味殊に構造的意味が把握に困難な場合がある。このような時に我々は屢々形態に頼る。例えば、不定詞 (Infinitive) で表わされる動作の主体を表現するに for と実詞を用いる場合、事実この結合形態がそのように把握されたものの表現形態であるかを知る手掛りとして、次に示す例に見られるように、それが文頭にくることとか、又はこの結合形態の前に休止（コンマ）がくることに頼る。

For Miss Richmond to undertake setting him free, I own, was quite unexpected (Goldsmith)
(リッチモンド嬢が彼を自由の身にしようと企てることは、うちあけて言いますが、全く期待されなかつた)

it is a scandalous way of travelling, for a great gentleman like you to walk a-foot (Fielding)
(あなたのような立派な紳士が徒歩で行かれるなんてことは外聞の悪い旅行の仕方です)

この場合も又歴史的考察に頼つて意味の把握に努めることがある。例えば英語の未来時を表わすとされている will, shall の意味は時には未来を表わさない。従つて単に未来時制なる文法範疇だけで済まされないことを確実にするために will と shall の起源的意味を参考にするのである。しかしながらこれはあくまでも現実の意味を把握するための手段であつて意味そのものではない。このように考えると、to be about の about は前置詞であり、その理由として過去において不定詞も前置詞を取り得た、そして少数の前置詞は現在でもそれを維持しているとするイエスペルセンやポウツマ (H. Poutsma) の見解は妥当ではないと思われる。彼等は先ずこのようなことが現在の言語意識として認められるかどうか考えなければならないのであつて、過去の事実を述べるだけで説明し終つたとしてはならないのである。しかしながら既に述べたように、語の機能的意味とか構造的意味と呼ばれているものは必ずしも常に明かではない。そしてこのような場合右の about のように、意見が人によつて異ることは稀ではない。例えば、play like you, near the house, worth 5 pounds の like, near, worth 等である、この場合これら表現の指示する本来的意味又はこれら表現と同価値な (equivalent) な言語的意味は理解出来るのであり問題はないのであるが、こ

れら表現そのものの機能的意味が不明なのである。辞書の取扱は大体は一致しているが、必ずしも決定的な態度を示していない。殊に worth は大抵形容詞として取扱われている。これは史的考察も加つての説明であろう。しかし、aboard, plus, minus 等が前置詞とも見做されているのであり、又 like him, worth notice の him や notice が与格(Dative)であるとすることは現在の言語意識からは妥当でないであろうから、worth も前置詞として差支えないであろう。

七

以上言語事実を分類し文法範疇を形成する場合、結局は言語的意味殊に機能的な意味を基準にすべきことを述べてきたのであるが、最後に、文法範疇をこの言語的意味でもつて説明しただけで実際に言語を充分に理解していることになるかどうか考えてみる。例えば、フリーズによると、「主語」(Subject) というものは第二語群の語と結合して文の根本的型を形成する第一語群の語である(前掲書 一七六頁)。このような説明を実際に役立てるためには、この第一語群、第二語群の語とはいかなるものか、そしてこの特殊の言語的結合に対応する本来的心的作用がいかなるものかよく理解することが必要である。繰返して言うが、イェスペルセンのCは言語的意味と考えるのが妥当である。氏が「言語外」と呼んでいるものも言語外の心的作用に即している言語的心的作用なのであつて、それ自体あくまでも言語的なものと考えなければならない。この言語の意味を言語的基準として文法範疇即ちイェスペルセンのBを作る時、論理的心的作用や本来的心的作用から見ると同一類群をなすとは考えられないものが同一類群をなすことは、以上述べてきたことからして明かであろうが、今一例をあげる。イェスペルセンのランクの立場からすると、furiously barking dog と very hot iron は共に三次項、二次項、一次項からなるものであるが、本来的思考からすると前者だけが正当にこの次項の関係を表現しているのであつて、後者の very と hot との関係は決して三次項と二次項の関係でない。何故なら very は hot なる附属性を限定はしていない。very hot 全体で iron を限定し、しかもその場合 vry hot は必然的に他の低い熱度を示す同一種の実体である鉄との比較を意味する(「品詞の機能」一〇頁参照)。このような統一的な本来的心的作用や論理的心的作用でもつて言語的な文法範疇を検討すると文法範疇は崩壊するのである。しかしこのような研究は言語の根本的理解には重要である。

「註」このような本来的思考作用に従つて英語の文法範疇を解明したものが中島文雄氏の「文法の原理」である。

言語は言語独自の領域を持つているものではあるが、しかし最初に述べたように、言語は我々の経験の記号である。経験と結びつかない言語は言語の役を果し得ない。我々は本来的心的作用を反省的には理解していないのが普通であるが、この作用そのものは常に行われているのであり、ここに我々の相互理解の根本的原因が存している。この点言語はそれ特有の領域を持つていながら、数学のような学問とは性格を異にする。数学も勿論現実の経験に関係を持つこともあるが、必ずしもその必要はなく数学の世界内で終始して少しも差支えない。これに反して言語は言語の世界だけで終始することはその本質上到底許されない。従つて社会的に決まつていて、言語間に違いのある文法範疇を、もつと一般的な思考作用でもつて説明することは必要である。かくして名詞は「ものの名」であるとか形容詞は「ものの性質や形状」を表わす語であるなどと説明することは時にはかなり効果的である。そしてこのような説明は直接であれ間接であれ、ともかく我々の本来的心的作用と関係を持たねばならない言語の性質からして、当然部分的には妥当するのである。唯あくまでも一致は部分的であることを忘れてはならない。同様に言語的思考作用と論理的思考作用との関係の研究も又必要である。

更に言語は広く場面との関係においても研究される。筆者は「言語」(Language, Langue) と区別された「言」(Speech, Parole) の学問をここに見出したい。そして場面を形成する我々の経験、更にある特定の個人の経験と文との関係、それに関聯して生ずる文の価値の問題等が、ある人々によつて「文体論」(Stylistics) と呼ばれている。そしてこのような意味での「言」の学は今後発展する余地のあることは認めなければならない。従つて、問題を文法に限つて、フリーズの言う構造的意味と記号との関係が文法本有の課題であるとしても（前掲書　五六頁）、以上述べた種々の言語外のものと言語との関係の研究は決してその価値を失わない。

（一九五三、一一、三〇）